

⑨ 瀬田萬之助「両親への手紙」(新版『きけ わだつみのこえ 日本戦没学生の手記』岩波文庫、平成七年)

[昭和二十年三月五日付 両親への手紙]

この手紙、明日内地へ飛行機で連絡する同僚に託します。無事お手許に届くことと念じつつ筆を執ります。

目下戦線は膠着状態にあります。何時大きな変化があるかも知れません。それだけに何か不気味なものが漂っています。生死の境を彷徨(ほうこう)していると、学生の頃から無神論者であった自分が今更のように悔まれます。死後、どうなるか? といった不安よりも現在、心の頼(よ)りどころのない淋しさといったものでしょうね。その点、信仰厚かった御両親様の気持が分るような気がします。

何か宗教の本をお送り願えれば幸甚です。何派のものでもいいのです。何派のものでも期するところは同じだと思います。たとえ一時的でもいい、心の平衡が求められればいいのです

この土地の言葉はタガログ語です。この点、外語で支那語を専攻した自分にはちょっと取りつきにくいですが、いくらか土人の言葉にも馴れました。言葉が分ると自然と人情が湧いて来るものです。皮膚の色が変わっても人情上は変わりありません。母上がいつかおっしゃられたように無益の殺生は部下にも堅く禁じております。

マニラ湾の夕焼けは見事なものです。こうしてぼんやりと黄昏時(たそがれどき)の海を眺めていますと、どうして我々は憎しみ合い、矛(ほこ)を交えなくてはならないかと、そぞろ懐疑的な気持ちになります、避け得られぬ宿命であったにせよ、もっとほかに打開の道はなかったものかとくれぐれも考えさせられます。

あたら青春をわれわれは何故、このような惨(みじ)めな思いをして暮さなければならぬのでしょうか。若い有意(ゆうい)の人々が次々と戦死していくことは堪(たま)らないことです。

中村屋の羊羹(ようかん)が食べたいと今ふっと思い出しました。

またお便りします。このお便りが無事に着けばいいのですが……

兄上、姉上、そして和歌子[姪]ちゃんにくれぐれもよろしく。

早々不一

昭和二十年三月五日

父上 様

母上 様

瀬田萬之助

(註：文中のゴシック体の文章が、これまでカットされていた部分である。)

作者プロフィール 瀬田萬之助（大正十二年〈一九二三〉～昭和二十年〈一九四五〉）北町生まれ。瀬田栄之助の弟。昭和十六年四月、東京外国語学校支那語貿易科に入学。昭和十八年十二月一日入営。昭和二十年三月七日、フィリピンのルソン島付近にて戦病死。陸軍少尉。享年二十一歳。

⑩ 瀬田栄之助「別れ霜」抄（創作集『いのちある日に』講談社、昭和四十五年）

「……そのことについて答える前に、いったいぜんたい、戦争そのものがよろしくない。パパの反戦の理論はすこぶる簡単……戦争は人間が人間を殺す極悪な犯罪であるからなんだ。戦争にはぜったい大義名分なんてあろうはずがない。正義に反する嘘っぱちな屁理屈があるばかりだ。戦争はむごったらしい殺戮であるがゆえに一大罪悪であるというパパの主張は荒削りだが、あらゆる思想に優先する。戦争は唯の遊戯じゃない。このことは兵士として戦争を実体験してきたパパの痛烈な叫びであり、悲願であり、厳粛なる確信なんだ……」

俊介はあえぐ息づかいのもとに言葉を強めていった――。

「パパは戦争の協力者ではなかったけれど、参加者だった……ファシズムと兵役を強制されたご時勢だったから致し方なかったんだ……しかし、パパはあのおとき反戦の勇気が持てなかったことを生涯の恥辱としている。その点、万ちゃんは偉かったと思うよ……」

俊介は今次大戦に学徒兵としてフィリッピンに出征し、ルソン島で戦死する直前、戦争憎悪の遺書をめんめんと書き残していった弟の万之助の思い出に松明（たいまつ）の火を燃やした。彼の遺書は他の多くの反戦学徒兵の手記とともに一本にまとめられ、ベストセラーズとなった。ごく最近では本多顕彰氏の推薦で高校二年の『現代国語』に収録されていた。

「万おじさんはどんなひとだった？」

由紀子は小頸をかしげて訊いた。

「そりゃ純粹そのもののような男だったな。東京外語のシナ語科の学生だったころは蒸留水という渾名（あだな）をつけられていたぐらいだからね。パパはいつも思うのだけれど、万ちゃんのような純粹な男は、戦後の汚濁の世界ではとても生息不可能だったろうなア……生まれたときから弟はきれいな死にかたをするように運命づけられていたんだ……」

「おばあちゃんはお布団のなかで、万おじさんの写真を大事そうに抱いていたわね」

とめは臥床すると、茶の間に掲げられてあった万之助の遺影をはずさせて、床のなかにいれ、片時も躰から離そうとはしなかった。